

国内事例
in Japan

1

事業型NPOの世代交代／
フュージョン長池

1960年代以降、日本の高度成長に伴うベッドタウンとして開発された多摩ニュータウン。その中で八王子市長池公園は20ヘクタールの自然保全型公園であり、自然館（体験学習施設）を含めて、地域住民に憩いや里山文化、コミュニティの場を提供している。同公園の指定管理者（3社の連合体）のうちNPO法人フュージョン長池は、90年代から「地域住民の暮らしの支援事業」を担う「事業型NPO」の先駆だ。住都公団（現UR都市機構）が開発、ゼネコンが建設、大手企業のチェーン店舗が立ち並ぶニュータウンで、住民の声は届かず、資金も大資本に吸収さ



会長の富永氏（左）と理事長の田所氏。「第一世代が若手を上からでなく下から支えることが大事」と富永氏。

れる——これに違和感を抱いた富永一夫氏が99年に47歳で設立。環境問題や社会課題の取組をリタイア後のセカンドライフ的にとらえる向きもあるなか、圧倒的に若いNPO法人の創業者だった。

NPOの時代を
終わりにしたくない

団地管理支援事業、高速インターネット普及支援事業、住宅建設支援事業などを通じ「地域のお世話係」として実績を上げた富永氏は、活動のNPO法人化とともに01年長池公園自然館の業務受託することになり、03年の指定管理者制度公布後の06年には長池公園と14年からは八王子市東部区公園（公園数152カ所）の公園管理も担った。

「47歳から仮に30年間活動するとして、15年は実務で基盤をつくり、後半は人材育成に力を入れると決めていた」（富永氏）の言葉どおり、

同団体は求心力がある創業メンバーの事業ノウハウに魅力を感じて集まった8人の次世代がそれを引き継ぐことで、活動の幅を広げていった。

ニュータウンが次世代の
ふるさとになるとき

富永氏から理事長の座を引き継いだ田所^{たかし}氏は、07年長女誕生を契機に同地域に移住し、地域に根ざした活動を求めて勤務先を退職した人物だ。富永氏との出会いを「まず個人があってそれを活かす場としての組織のあり様が新鮮。なにより事務所で働く全員が楽しく幸せそうだった」と回想する。とはいえ当初は、NPOはボランティアという認識が強く、「事業型NPO」や「NPOの経営」という概念を理解できなかったとも。富永氏ら創業世代の丁寧な教えを受けて成長した後継世代は、その自覚の証として、2012年「緑の都市賞」に応募し国土交通大臣賞受賞という快挙を成し遂げる。

富永氏は「創業世代はアグレッシブに突き進むが、豊かな時代に育った後継世代に同等のハングリー精神を求めるのは間違い。田所にはニュートラルでマイルドな資質があり、これがうちの新しいリーダー像」と言う。「あくまでも住民が主役。ニュータウンがふるさとになる時代に、私たちが普通に暮らせる社会が理想」と見据えた新旧世代二人に今年1月、総務省の「ふるさとづくり大賞の団体表彰」受賞の朗報が届いた。



地域と協働し合う公園として、小学校の総合学習の一環で落ち葉かきを実施。

【聞き手：つな環編集部】